



同窓會記事

●本學院出身者住所

- 望月寬榮君 本學院詰 高等部卒業生
- 野口龍學君 佐賀小城郡三日月村金田妙國寺内
- 上木龍慶君 愛媛縣西宇和郡喜須來村法眼院内
- 友井能慈君 丹波國北桑名郡字大野村蓮乘寺住
- 那波惠頂君 本學院高等部在學
- 望月海泊君 全
- 早川玄頂君 全
- 泉 義敬君 全
- 望月宗康君 靜岡縣興津町法泉寺内
- 黒敷學勇君 本學院高等部在學
- 丸山勝龍君 東京深川區御船藏前二四、武井方

溝田玄靜君 本學院高等部在學

小野歡實君

則武諳淨君 岡山縣東田町蓮昌寺内

森 亮遠君 本學院高等部在學

藤岡一行君 全

松木本典君 全

加納學一君

小林貞宜君 近衛歩兵第二聯隊第二中隊内

望月本啓君 本學院高等部在學

山内慧戒君 全

●三角山龍華寺に參る

銅子量海

一昨々年僕は現役兵にて、朝鮮平安北道江界に守備として駐屯した。此機を利用して朝鮮の佛教狀態を見んき九月二十四日、秋季皇靈祭を幸ひ豫て聞いて居た三角山龍華寺を訪ふべく出發した。町をはなれて鴨綠江の支流なる東來江を渡舟して荒原を過ぎ、聽て極めて急なる山道を登つたが、寺らしきものも見えず、或は方向を誤つたのではないかと幾度か躊躇しながら約一里程

も進むと山の中腹に出た。附近を見ると粟稗、唐黍等が作つてある山畑に出た。遙彼方に瓦屋根の家が見ゆる。果せる哉。僕の索める龍華寺であつた。寺は四間に六間位ひで極めて粗末な建物一つあるのみだ、入口の額面には「華嚴會上」と書いてある。中より五十前後の僧が二名驚いた体で僕を迎へた。僕は片言まじりの鮮語を以て參詣の意を告げた。彼は僕の意を了解せしものと見ゆ、喜んで佛間に請じて厚く待遇して呉れる。正面には金佛の世尊が一体奉安しあるのみ、朝鮮に於て始めて釋尊の御影を拜するのである。朝鮮の佛教全く地に落ちたるを思ひ、僕は只管此の土の民も佛教を信し本佛の本懷たる法華の法雨に浴し、本門三秘に歸依せしむる期の一日も早く來る様に祈るのであつた。佛間の横に本尊らしきものが二軸懸けてあつた。諸兄の参考まで左に示す。

靈通廣大慧鑑明

住左空中暮無方

左補處日光遍照消火菩薩

南無金輪寶界懺盛光如來佛

右補處月光遍照息火菩薩

羅 列利 士

周察人生壽竿長

協例會上聖賢衆

南無金剛會上佛菩薩

擁護會上靈抵等衆

こしてある。先づ參詣は終へて住職金法尤と對話するに、此寺は同じ平安北道にある臨濟宗大本山普賢寺の末寺なる由、昔の書物でもあるかと問へば、先住が皆持ち去つて、「なぶそ」と答へた。「なぶそ」とは無いとの謂である。經文としては只鮮字を以て書いてある者一巻あるのみである。隣室を見るに婦人三名と二人の子供が居る。住職に向つて、是れ御身の妻子なるか、と尋ねれば、彼きまりわる氣に云ふやう、私は出家である故に妻子なしと頻りに辯解するのである。僧侶は妻を持たぬものとのみ思ふ彼は健げである。元の座に就くと大きな茶碗にそばがきのようなものを出して進めたが、駐屯中は鮮人の食物は禁じられてある

が厚意を斥けるも宜しからずと一寸手を付けたが、食べられるものでない。彼等の生活法を聞くに、僅かばかりの寺領を耕作して辛くも生命を保つて居るなごみ種々の話に二時間を過した。又再會を期して寺を辭して下山した。朝鮮一帶の佛教は如斯である。一般の社會は佛教や僧侶の價値を認めず、又無理からぬ事、其の僧侶なる者も多くは讀み書きも能はぬ無智の者が多いのである。聞く印度支那の佛教の状態も殆ど同様であること云ふ事だが、他邦は措き、我國内地の佛教状態は如何であるか、今日では一步一步此の状態に近附つゝあるてはないか。此儘歲月を送らば第二の朝鮮佛教に伍する期の必ずや遠からざるを思ふ。志を懷いて立つ前途多望の諸兄は如何に考へ居るか。よしや第二の日蓮名残らずとも第三の日親上人第四の日持上人を以て任じ共に四海歸妙を實現すべく學び努力すべきである。僕は彼地の頽勢を見るに堪へないで茲に一言しだ次第である。拙なき筆も諸兄の心に多少反省の料ならば幸甚である。

■講堂新築

久しく狹隘を告げつゝも舊態を改めざりし本學院の講堂は、這般福井縣武生町青山市之丞氏の特志を以て金壹千五百圓の寄附を得之に院長御手許金の御下賜を仰ぎ、工費金參千圓の見積りにて、本院の東に隣接せる舊運動場を擴張し、此に間口十五間奥行六間の講堂を新築する事に決し、五月下旬竣工の豫定にて目下工事を取り急ぎつゝあり。

■木村師の講演

十二月二日午後一時、梵語大學出身木村龍寬師は特に吾等が爲めに登院せられ、舊交ある山口教授の紹介によりて登壇、「印度文明の新舊」と題して實地踏査研究になれる該博なる新智識を傾注して彼地の歴史風俗、宗教の萬般に亘りて有益なる講演あり。吾人をして所謂彼の舊思想の高雅なるには畏敬の念を禁ぜざらしめ、殊に結末に至り、その佛教状態論して吾が日蓮主義

の「月氏へ歸るべき」理想を痛論せられしに
は、誰しも感ぜざるものなかりき。茲に謹
んで其の勞を感謝す。

■講演部より

○光堂説教 六月十四日上ノ山光堂に
於て説教會、早川、森、小林の三名出張。

○團體布教 六月十日、玉屋に投宿せる石
川縣團參の請に依り、藤田部長及森、菊池等
法話の爲出張、多大の法益を興へたる者の
如くなりき。

○幻燈布教 八月四日、西八代榮村井出經
王寺信徒の請により、樋口、松木、菊池、佐藤
四氏出張。

○幻燈布教 九月八日、本郡睦合村本郷妙
善寺にて幻燈會開催、辯士望月(海)、泉、早
川、今村等。

○幻燈布教 九月十二日、部長引卒の下に
早川、溝田、小林、佐藤の諸兄は本院を發し、
左の通り幻燈並に演説會を開き、隨所多大
の歡迎を蒙りたること感謝に餘りあり。

第一日 中巨摩郡大柵妙善寺に於て開會

會衆凡そ三百人、群衆堂外に溢
れ豫想外の盛況たりき。

第二日

全郡青柳昌福寺に於て開催、前
夜に勝る盛況を得たり。

第三日

中巨摩郡鏡中條村長遠寺にて開
會、恰も雨天なりしが比較的成
功を収めた。

第四日

西八代郡市川大門町圓立寺に於
て開會、遠近競て群集せり。

○法難會 九月十二日、法難會虔修の後講
堂に於て茶話會を開き、各級總代の演説あ
り、例に依り本院に於て牡丹餅の供養を受
けて散會す。

○説教 十月八日、陰曆の法難會にて高
等部生一同奥之院にて通夜説教をなす。

○説教 十月十四日、七面山大法要に付
例年の如く高等部生は親下の隨伴として參
詣通夜説教をなす。

○會式 十月十二日午後六時より、本院
に於て大幻燈會開會、午後十二時終るや黎
明に至る迄、高等部生交替説教をなせり。

○道路布教 十一月四日、遠足の歸途、早

川、森、松木、菊池等高等部生は一行に遅れ、
南部警察署前にて驚異と隨喜とに集まれる
群衆の爲に各一場の演説を試みたり。

○送別會 高一小林貞真君は近衛師團に、
中二内藤善清君は第十九師團に孰れも入營
せらるゝに付き、本會にては十一月十一日
心ばかり茶話會を開きてしばしの別を惜み
たり。兩君幸ひに健在なれ。

○臨時追慕祭 送別にぬれたる袖を干す間
もなく、同日は醒悟園の聖が忌辰に當れる
を以て、一同本妙庵に參拜手向と香華に復
た新らとき哀愁を感じぬ。夜に入ては、森、
松木、望月本啓君其他中五生有志にて通夜
説教をなせり。

不斷の活動によりて何人にも認められつゝ
ある我が講演部は、更に諸君が熱誠なる
努力によりて其の實力を確實ならしめた。
吾人は此の上もない誇りとして、大正五年
度に於ては諸君が各自平均六回宛の練磨を
せられたこと云ふ新記録を諸君の前に發表す
る事の出来る光榮を有するものである。こ
の一年間の成績は更にまた豫想外の發達を

示して、多くの新しい顔筋れに將來ある辯士を發見する。こゝが出来たのは、是亦本部の面目とする處である。

何事も練習を要する。中にもわけて辯論は其の効果の顯著なものである。啞辯だ無口だと呼ばるゝ人に却て演壇の巨人を發見する事が出来る。練磨に上こす天才が何處にあらう？現に天下知名の辯士に見よ、其發達期に於ける努力や奈何、天性を啣つた諸君よ、決して徒らに自棄する勿れ。涼々たる流の邊、峨々たる蒼峯の頂、飛瀑激するの處、松風之に和する處、隨處やがて諸君が練磨の好適處ではないか。思へ諸子！この自然を對告衆としての練磨の如何に爽快なるかを。斯くて熟練せる草稿を提げて當番の演壇に現はる事あらんか、その天性の擲つべからざるを知りて向上するも容易であらう。諸兄！ともに俱に今後の發達否努力を競はうではないか。——森生——

■文學部から

學師云々祖上示レ滅干今六百有余年其遺

意唯在三言語文字之間一故不レ精三十卷字句則不レ能レ知吾祖之妙意一也

彼の古聖先賢が演説を以てよく人を感化すも、その今日に傳へたるは偏に文章の力によるのだ。

經典あつて始めて釋尊の遺風が今日に傳はり、論語あつて孔夫子の道今に滅せず、四福音あつて基督は尙今日に活きて居るではないか。

勿論文章と演説とは一得一失あれども、居ながらにして古今を論談し、一室に千里の遠きを示すに至つては、正に文章が演説に優ること明かである。

尙又妾りに口外し難き心中の秘奥、幽玄微妙なる深理及感情を寫し出すに至ては、最早や文章の獨り舞臺である。

吾等が祖文を拜讀して恰も生身の聖祖に面奉し親く深遠の妙旨を拜聽するの感あるは、聖祖の御精神が祖文となつて末代の我等を救護せらるゝからである。

大詩人大文豪とは、唯詞藻に富み其の欲する處に従ひ美文麗句を連れ得るものにあ

らずして、云ふべきものを有し又其の云ふべき方法を知れるにあるのだ。

云ふべき思想があつて、之に伴ふ文ある時、其の文は不朽にして其の思想も亦不朽である。

爰に於て吾人の任務如何といふに、勿論本化の妙義を一切人類に領知せしむるにある。大智舍利弗尚智を以て入るこゝの出来ぬ難解難入の法門、我等が終日竟夜に聖祖棲神の靈地に住して、信力を以て學んだ深遠の妙旨は、如何に大雄辯家でも又大思想家でも言説と測量する事は出来まい。かゝる胸底の秘奥を筆先に顯して、廣く滿天下に永く盡未來際に普及すること、否現當二世の衆生を救済して四海歸妙の春を迎へると云ふ大事業は、たゞ獨り文章の巧拙にあるのだ。於爰我文學部の責任や、將た希望や重且大なりと云はざるを得んのだ。
勵めよ諸君々々！
(KF生)

■運動部から

大正四年大會に於て、當部發展の議案も

遺憾なく決定せられ、日に増々盛大となり一方に精神的養育、一方には肉体的養育と共につゝめ來りしが、茲に入り來りし一問題は他なし、校舎の新築也。之れ數年前よりの大望なりしか、今年に至つて事漸く成んとす。依て其の場所に就き教師課役課等種々會議の結果、當部の庭球場最も適當の地と、愈々此處を以て校舎新築の場と定めらる。而し此の運動場たるや、前後數回改修に改修を加へ非常なる勞力を費し、今や稍完全なる場所とはなれるものにして、今此の運動場を失はざ、他に求むべきの所なく、當部のみ衰微するの止むを得ざるの境となるなり。而し我等百餘名の生徒の延山に負笈せし目的たるものは他なし、行學の二道を勵み宗義を光顯し、以て毒氣深入の者は勿論、一再衆生に釋尊本懷たる妙法五字の大良藥を服せしめ以て安心立命を得せしむる其の活動の任務を全うせんがための故なり。校舎ありての運動場なれば、校舎不備にして完全なる運動場あるも満足する事を得ず、依て部長を初め幹事會議の上此

の時を幸ひ講堂新設の地として奉獻する事となれり。而し多くの金錢と勞力とを費し折角改修せる庭球場を一度も用ひざるも残念なれば、茲に於て六月二十五日午前八時より堂々開場式を舉行し、同時に庭球紅白競技並に弓術大會をも行ひ、相當の賞品授與等ありて盛大に終れり。
 大正五年九月十九日午後一時より會員一同出席して弓術場を修繕す。
 大正五年十一月四日 立太子式記念遠足として、内船寺即ち四條金吾の舊跡に參詣し、尙倉ノ平南部妙淨寺正慶寺等を參拜し南部に於ては道路布教を行ふ。森田教頭、田附部長の引卒にて生徒五十七名なり。
 大正五年十一月二十三日、講堂新築場として獻せし運動場未だ工事を初めざるを以て、其間此處にて庭球する事となり、生徒一同にて之を掃除し前通り盛んに運動なごつ、あり。(SSS生)

■金品寄附者芳名

一金貳圓五拾錢 本學院 森田教頭殿

一金五圓	高倉典侍殿
一金五拾錢	身延村 望月寬榮殿
一金壹圓	身延山 本院殿
一金壹圓	中條 中村是本殿
一金貳圓	身延支院 御中
一金五拾錢	望月寬榮殿
一金五拾錢	車田村 法圓寺殿
一金壹圓	大野 黑坂醫師殿
一金五拾錢	大野 本遠寺殿
一金壹圓	岡山 高見慈悅殿
一金壹圓	山梨 柴田頸秀殿
一金五拾錢	岩間 大乘寺殿
一金五拾錢	身延 圓光庵殿
一金五拾錢	靜岡 小屋瞬正殿
一金壹圓五拾錢	駿州 妙慶寺壇徒殿
一金五拾錢	身延 妙石坊殿
一金五拾錢	身延 脇本執事殿
一金五拾錢	秋田 齊藤智孝殿
一金五拾錢	身延 大乘坊殿
一金五拾錢	ツバキ村 青年團殿
一金壹圓	江州 藤岡即祐殿
一金五拾錢	飯富 井上海清殿

雜誌學生	全	遠藤是雄君
滿州寫真帖	全	辻能學君
御即位大典錄	本會員	江原亮勇殿
天鼓(全)	山梨	天鼓社殿
三寶(全)	全	森江書店殿
我宗門(全)	全	同我會殿
日宗新聞(全)	全	日宗新聞社殿
山家學報(全)	全	伊藤海開殿
大崎學報(每號)	東京	日蓮宗大學殿
雜誌唯一	大坂	日宗唯一青年團殿
一金壹圓	下總	清水龍山殿
一金貳圓	本學院	森田教頭殿
一金貳拾錢	身延	花之坊殿
一金參圓	東京	沖殿
一金五拾錢	身延	深敬病院殿
一金五圓	甲府	土屋梅子殿
一金五拾錢	陸合	妙善寺殿
一金五圓五拾錢	身延	武井坊殿
一金五圓	林儀	平殿
一金五圓	林德	治殿
秋田齊藤智孝殿	金澤	野村三人殿

